

平成 22 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530095
 研究課題名（和文） 19世紀フランスにおける「共和国モデル」の形成の研究
 研究課題名（英文） The Study on the making of the French republican model in the 19th century.

研究代表者

北川 忠明 (KITAGAWA TADAAKI)
 山形大学・人文学部・教授
 研究者番号：00144105

研究成果の概要（和文）：

本研究は、従来ジャコバンの性格が強調されてきたフランス共和国モデルの再検討の動向を踏まえ、その特質と現代の変容を理解するために、フランス革命前後から、共和国モデルの確立した19世紀末までに時期を設定し、政治思想史的観点からアプローチしたものである。具体的には、ヴォルテール、コンドルセを初めとして、19世紀末のA. フイエ、E. デュルケムまで、反ジャコバンの共和主義の系譜を辿り、ロザンヴァロンが言う「修正されたジャコバン主義」としての「改革された共和国モデル」の特質を明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：

This study's aim is to reconsider the French republican model. For this aim, this study concentrates on the anti-jacobin republican thought from the French Revolution to the end of the 19th century. Through this study, The character of the French republican model as the Jacobinism amended will be made clear

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：フランス、共和国モデル、19世紀

1. 研究開始当初の背景

フランスでは、1980年代以降 F. フュレのフランス革命研究や P. ロザンヴァロンたちのフランス政治史研究の成果等があって、フランス共和国モデルをルソー ジャコバンの性格に引きつけて理解する見方を見直す動

向が生まれていた。フランスにおける共和主義ルネサンスを代表する C. ニコレの『フランスにおける共和主義理念』（1982年）がその嚆矢である

他方、わが国の共和主義研究では、J. G. A. ポーコックや Q. スキナーたちケンブリッジ

学派の研究に依拠した共和主義の見直しが、経済思想、政治思想・政治哲学の領域において活発に行われてきた。

英米系の共和主義復興の潮流が自由主義の見直しを意図するところに共通の特徴があるとすれば、逆に、フランスでは、フランス「共和国モデル」の再検討が進められ、共和主義のいわば自由主義的な再解釈を行う動向が生まれていたと言える。

このフランス「共和国モデル」は、普遍主義的な人権宣言、単一不可分性、公私の厳格な分離に基づくフランス的政教分離(ライシテ)、中間集団の忌避などの諸要素から構成されるものとされるが、常にルソー=ジャコパン的という形容詞を冠せられてきたし、我が国においてもそのように理解されてきた。

本研究は、以上のような状況を背景として、

フランス革命以後のフランス共和主義はルソー ジャコパン的と言われる要素を不断に払拭しようとしてきたことを強調し、第三共和政において確立した「共和国モデル」はジャコパン的な「徳の共和国」ではなく「知 savoir の共和国」であると主張する C.ニコレの研究(『フランスにおける共和国理念』、1982年)、「共和国モデル」は、ジャコパン的というよりは中間集団によって「修正されたジャコパン主義」であるとする P.ロザンバロンの研究、さらにジャコパンのようにローマ共和政をモデルにするのではなく、アテネ・デモクラシーをモデルとするといった S.オーディエや J.F.スピッツたちの研究に依拠しながら、「共和国モデル」の再解釈を試みたものである。

2. 研究の目的

以上のような研究動向を踏まえ、本研究では、政治思想史的観点から、フランス革命前後から 19 世紀末までの、反ジャコパン的共和主義の系譜を辿り、「非自由主義的」とされることの多いフランス「共和国モデル」の見直しを図った。

さらに、この政治思想史的研究を通じて、現代フランスにおける、地方分権改革に関する憲法改正問題、スカーフ着用禁止法制定等にかかわって行われている「共和国モデル」の修正の意味を明確化し、「共和国モデル」が、どこまでリベラリズムや多文化主義と折り合うことが可能なのかという理論的問題への見通しを得ようとした。

3. 研究の方法

研究対象としては、ヴォルテール、コンドルセ、イデオログたち、キネ、バルニ、ルヌーヴィエ、デュルケームを選び、それぞれの共和国像を明確化しようとした。

このために、フランス革命以後の共和主義思想を三つの時期に区分し、時期ごとに主要

思想家をとりあげた。

(1)まず、フランス革命期では、ヴォルテール、コンドルセ、さらに D.ド・トラシたちイデオログたち、アテナイをモデルとした共和主義の系譜をとりあげ、特にヴォルテールとの思想的継承関係を検討しながら、モンテスキュー・ルソーに代表される共和国のローマ・モデルまたはスパルタ・モデルとの対立を明らかにした。

(2)次いで、19 世紀前から第三共和政期にかけて活躍する E.キネ、J.バルニ、C.ルヌーヴィエたちをとりあげ、「共和国モデル」におけるカント哲学の影響を検討した。

(3)そのうえで、第三共和政の確立に貢献した E.リトレ、A.ファイエ、J.フェリーたちが、産業化とデモクラシーの発展に対応して、どのように「社会」という要素を共和主義思想に統合したかを検討し、とりわけ E.デュルケームの社会学思想が、フランス「共和国モデル」の確立にとって持った意義を明らかにしようとした。

4. 研究成果

以上の研究によって、本研究では次の点成果として得ることができたと考える。

(1)従来ほとんど系統的に扱われることがなかった、19 世紀フランス政治思想を「共和国モデル」の形成史の観点から包括的に明らかにする手がかりを得ることができた。

(2)ルソー ジャコパン的とも形容されてきたフランス共和主義のステレオタイプの理解を正し、フランス「共和国モデル」を思想と制度の側面から正確に理解する糸口を得ることができた。

(3)ローマ共和政モデルの近代における継承を強調する英米における共和主義復興に対して、本研究では、近代における共和主義がどのような変容を遂げざるを得なかったかに力点を置いて、フランス共和国モデルの歴史的形成を研究したことによって、共和主義と自由主義との結合の二つのパターンとして、アメリカ・モデルとフランス・モデルとの比較の視点を得ることができた。

(4)フランス「共和国モデル」の歴史的形成の理解は、19 世紀末に進められた植民地帝国建設との関係を問いながら、現代フランスにおける欧州地域語・少数言語憲章批准問題、地方分権改革に関する憲法改正問題、スカーフ着用禁止法制定等に見られる「共和国モデル」の揺らぎと限界を明確にするうえでも、また、共和主義と自由主義や多文化主義との統合がいかんにして可能なのかという理論的問題に取り組む手がかりを得ることができた。

なお、モンテスキュー及びルソーの共和主

義論との対比でヴォルテールの共和主義論を検討したものについては成果を公表している。

コンドルセ以降については執筆中で、近々発表の予定であるが、19世紀末に確立したフランス共和国モデルの特質に関して、コンドルセ以降の思想家たちの共和国像を素描した論説は公表している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

北川忠明、多様性にかかれた共和国 A.ルノーの応用政治哲学、彦根論叢(滋賀大学) 査読無、383号、2010年、55-76.

北川忠明、フランス「共和国モデル」の現在、『思想』、査読有、1020号、2009年、4月、91-115.

北川忠明、ヴォルテールと共和主義、山形大学法政論叢、査読有、第43号、2008年、1-57.

6. 研究組織

(1)研究代表者

北川 忠明 (KITAGAWA TADAAKI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：00144105

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：